

# 読賣新聞

2012年(平成24年)

1月31日 火曜日

## 東北沖 大地震起きやすく

東日本大震災の地震発生がきっかけになり、東北地方沖の太平洋プレート深い部分で、岩盤同士が押し合っていた力が、引く張りが合う力に転じていたことを、海洋研究開発機構などの研究グループが突き止めた。引く張る力がプレート内より強く働くようになり、マグニチュード(M)8・1の昭和三陸地震と同じタイプの大規模地震が起きやすくなっていることを示す成果。31日付の米物理学会誌に掲載される。

### 海洋機構など研究

東日本大震災の本震は陸側のプレートの下に、太平洋プレートが沈み込む「プレート境界」で起きた。この太平洋プレートの浅い部分では岩盤を引く張る力、深い部分では押し合う力が働いているが、巨大地震の発生で、このバランスがどう変わったかはわかっていなかった。

海洋機構の尾鼻浩一郎研究員らは昨年4〜7月、震源東側の南北150キロ、東西80キロの範囲に20台の海底地震計を設置して余震活動を調べた。その結果、太平洋プレート内で起きた余震の大半が、岩盤が引く張りが合うことよって起きる「正断層型」の地震だったことがわかった。プレートの深部でも引く張る力がより強く働くようになっており、研究グループは、1933年の昭和三陸地震と同じ正断層型の巨大地震が起きやすい状況になっていると分析している。

## 太平洋プレート 震災でバランス変化

### M9級も観測研究へ

発生予測に向けた研究が不十分だったため、超巨大地震の発生サイクルなどを新たに盛り込むことにした。

文部科学省は30日、東日本大震災を受け、大学などが地震研究を進める際の基本方針となる「地震及び火山噴火予知のための観測研究計画」を見直し、マグニチュード9級の超巨大地震の観測研究を新たに盛り込むことを決めた。南海トラフ沿いなどで想定される超巨大地震の防災対策に生かす。2月下旬に正式決定する。2013年度までの現行計画では、超巨大地震の